

序

この論文集は、京都大學文學部の創立滿五十年を記念するために、現在在職の教官の全部を執筆者とし、文學部紀要の特別號として、刊行するものである。

明治三十九年、すなわち一九〇六年の六月、京都帝國大學文科大學の名のもとに設置された本學部が、今日に至るまで五十年間の成長發展の歴史は、同時に刊行する京都大學文學部五十年史に詳述されているから、それについて見られたいが、單に講座數のみについていつても、創設時の二十三講座は、今や増加して三十五講座となつている。すなわち哲學科十四講座、史學科九講座、文學科十二講座である。學問の進歩は、この講座數を以てしてもなお不足を感ぜしめ、新講座の増設がしきりに提議されているが、人文科學の少くとも最も重要な分野は、あまねくことに網羅されているといつて差し支えない。且つその中には、他の國立大學に先だつていちはやく設けられたもの、或いは今に至るまで他には設けられずしてひとり本學部にのみ設けられたものがある。資料の堆積が、附屬施設の陳列館をして、博物館法による取り扱いを受けしめるに至つたのも、他に多く比類を見ないであろう。一方また教育學は、近き過去までは本學部の講座であつたのが、分離發展して

京都大學教育學部となつたのであり、京都大學教養部と京都大學人文科學研究所、みなまた本學部と親近な關係のもとに發足し、獨立の機構として發展しつつある。

この論文集は、このような歴史を有する本學部の諸講座を、現在擔當する教授、助教授、專任講師のすべてが、外遊中のただ一人をのぞき、こぞつて執筆したものであつて、あわせて四十六篇、大別して哲學、史學、文學の順序に排列されているが、その内容は、ひろく人文科學の諸分野にわたっている。各篇は各講座の現状を象徴するとともに、総合しては本學部の研究の現状を象徴するものといつてよい。

そうしてこの現状の背後には、過去幾多の先任者の努力が堆積されており、われわれはそれを繼承しつつあるという回顧が、この論文集に於いては、ことに必要であらう。けだし明治年間、東京帝國大學の設置につき、第二の國立大學が京都の地に設置されたについては、東京大學のみには學問が一方的に流れるのを是正するというのが、趣旨の一つであつたが、この趣旨は、文學部の前身文科大學の創設にあつても、有力に作用したと認められるのであつて、まず重んずるのは、實事求是、すなわち實證にもとづきつつ眞理を探求するという精神であつた。講座の性質により、重點を理論の究明におくものと、資料の整備におくものとがあつたこと、いうまでもないが、理論は資料によつて立てられ、資料は理論のために蒐集されることを、共通の目標とした。またそれと同時に重んずるのは、自由討究の精神であつた。半世紀の間に、國運はいくたびか起伏を経たが、學

部創設時の精神は、阻害されることなく、脈脈と継承されて今日に至つてゐることを、われわれは信ずる。したがつてわれわれは、この論文集が、われわれの先人に對してはざることなく、また將來の更なる發展を約束し得るものであることを、信ずる。

論文集は、宮崎市定教授を委員長とし、中西信太郎、重澤俊郎、小川環樹、織田武雄、長尾雅人、野上素一の諸教授を委員とする編集委員會によつて、編集された。題簽は新村出名譽教授の筆であり、*Miscellanea Kiotiensia* 云々の譯名は、泉井久之助、有賀鐵太郎二教授の發意による。英文要項については、フルブライト研究教授として來學中のカルフォルニア大學助教授ハワード・ヒベツト博士の助力を得、校正その他の雑務については、矢守一彦大學院學生があずかつて力あつた。そうして私は、たまたま學部長であるために、編集委員會の意思により、この論文集に序する機會を與えられたことを、光榮とする。

昭和三十一年十一月

京都大學文學部長

吉川幸次郎